

平安時代における長谷寺参詣の行程についての研究 その一

中 嶋 朋 恵

長谷（初瀬・泊瀬）の地は、古代に於いてはもがりの地として、中古から中世初期にかけては観音信仰の地として、その後伊勢詣での途次として特別な場所であった。

以下、観音信仰の地としての長谷寺へ至る京都からの行程についての諸例について、資料をあげるとともに、実地の踏査に基づく考察を加えたい。

【資料一 かな文学 散文】

*平安時代のかな文学（散文）に見える長谷寺参詣のうち、行程に言及しているものを以下にあげる。

*本文は『新編日本古典文学全集』に拠る。

○『蜻蛉日記』上巻 安和元年（九六八）九月

《往路》

かくて年ごろ願あるを、いかで初瀬にと思ひ立つを、たたむ月にと思ふを、さすがに心にしまかせねば、からうして九月に思ひ立つ。……忍びて思ひ立ちて、日悪しければ、門出ばかり法性寺の辺にして、あかつきより出で立ちて、午時ばかりに宇治の院にいたり着く。……破子などものして、舟に車かき据ゑて、行きもて行けば、贄野の池、泉川など言ひつつ、鳥どもみなどしたるも、心にしみてあはれにをかしうおぼゆ。……その泉川も渡りて。橋寺といふところにとまりぬ。西の時ばかりに降りて休みたれば、旅籠どころと

おぼしきかたより、切り大根、柚の汁してあへしらひて、まづ出だしたり。かかる旅だちたるわざどもをしたりしこそ、あやしう忘れがたうをかしかりしか。

明くれば、川渡りて行くに、柴垣し渡してある家どもを見るに、いづれならむ、かもの物語の家など思ひ行くに、いとぞあはれなる。今日も寺めぐるところにとまりて、またの日は樺市といふところにとまる。またの日、霜のいと白きに、詣でもし帰りもするなめり、脛を布の端して引きめぐらしたるものども、ありきちがひ、騒ぐめり。部さしあげたるところに宿りて、湯わかしなどするほどに見れば、さまざまなる人の行きちがふ、おのがじしは思ふことこそはあらめと見ゆ。……。

それより立ちて、行きもて行けば、なでふことなき道も山深きこちすれば、いとあはれに水の声す。例の杉も空さして立ちわたり、木の葉はいろいろに見えたり。水は石がちなる中よりわかへりゆく。夕日のさしたるさまなどを見るに、涙もとどまらず。道はことにをかしくもあらざりつ。紅葉もまだし、花もみな失せにたり、枯れたる薄ばかりぞ見えつる。こはいと心ごとに見ゆれば、簾巻きあげて、下簾おし挟みて見れば、着なやしたる、ものの色もあらぬやうに見ゆ。……乞食どもの坏、鍋など据ゑてをるも、いと悲し。下衆ぢかなるこちして、入りおとりしてぞおぼゆる。眠りもせられず、いそがしからねば、つくづくと聞けば、目も見えぬ者の、いみじげにもあらぬが、思ひけることどもを、人や聞くらむと思はず、ののしり申す

を聞くも、あはれにて、ただ涙のみぞこぼるる。

* 樺市〈写真①・②〉

* 長谷寺〈写真③〉

《復路》

かくて、いましばしもあらばやと思へど、明くれば、ののしりて出だし立つ。帰きは、忍ぶれど、ここかしこ、饗しつとどむれば、もの騒がしうて過ぎゆく。三日といふに京に着きぬべけれど、いたう暮れぬとて、山城の国久世の三宅といふところにとまりぬ。いみじうむつかしけれど、夜に入りぬれば、ただ明くるを待つ。まだ暗きより行けば、黒みたるものの、調度負ひて、走らせて来。やや遠くより降りて、ついひざまづきたり。見れば隨身なりけり。「なにぞ」と、これかれ問へば、「昨日の酉の時ばかりに、宇治の院におはしまし着きて、『帰らせたまひぬやとまるれ』と、仰せ言はべりつればなむ」と言ふ。……。

宇治の川に寄るほど、霧は、来しかた見えずたちわたりて、いとおぼつかなし。車かきおろして、こちたくとかくするほどに、人声多くて、「御車おろし立てよ」とののしる。霧の下より例の網代も見えたり。いふかたなくをか。みづからはあなたにあるなるべし。まづ、かく書きて渡す。

人心うぢの網代にたまさかによるひをだにもたづねけるかな
舟の岸に寄するほどに、返し、

帰るひを心のうちにかぞへつつ誰によりてか網代をもとふ

見るほどに、車かき据ゑて、ののしりてさし渡す。いとやんごとなきにはあらねど、いやしからぬ家の子ども、なにの丞の君などいふものども、轆、鴟の尾の中に入りこみて、日の脚のわづかに見えて、霧ところどころに晴れゆく。あなたの岸に、家の子、衛府の佐など、かいつれて見おこせり。中に立てる人も、旅だちて狩衣なり。岸のいと高きところに舟を寄せて、わりなうただあげに担ひあぐ。轆を板敷にひきかけて立てり。……。

さて、酔ひ惑ひて、うたひ帰るままに、「御車かけよかけよ」とののしれば、困じて、いとわびしきに、いと苦しうて来ぬ。

『蜻蛉日記』中巻 天禄二年(九七二)七月

《往路》

あがたありきのところ、初瀬へなどあれば、もろともにとて、つつしむところに渡りぬ。……。

さて、七八日ばかりありて、初瀬へ出で立つ。巳の時ばかり、家を出づ。人いと多く、きらぎらしうてもすめり。未の時ばかりに、この按察使大納言の領じたまひし宇治の院にいたりたり。……。

明けぬれば、急ぎ立ちてゆくに、贄野の池、泉川、はじめ見しにはたがはであるを見るも、あはれにのみおぼえたり。……。ようたての森に車とどめて、破子などものす。みな人の口むまげなり。春日へとて、宿院のいとむつかしげなるにとどまりぬ。

それより立つほどに、雨風いみじく降りふぶく。三笠山をさしてゆくかひもなく、濡れまどふ人多かり。からうして、まうで着きて、御幣奉りて、初瀬さまにおもむく。飛鳥に御灯明奉りければ、ただ釘貫に車を引きかけて見れば、木立いとをかしきところなりけり。庭清げに、井もいと飲ままほしければ、むべ「宿りはすべし」と言ふらむと見えたり。……。

からうして、樺市にいたりて、例のごと、とかくして出で立つほどに、日も暮れはてぬ。雨や風、なほやまず。火ともしたれど、吹き消ちて、いみじく暗ければ、夢の路のこちして、いとゆゆしく、いかなるにかとまで思ひまどふ。からうして、祓殿にいたり着きけれど、雨も知らず、ただ水の声のいとほげしきをぞ、さななりと聞く。御堂にもものするほどに、こちわりなし。おぼろけに思ふこと多かれど、かくわりなきにもおぼえずなりにたるべし、なにごと申さで、明けぬと言へど、雨なほおなじやうなり。昨夜にこりてむげに昼になしつ。

《復路》

音せでわたる森の前を、さすがに、あなかまあなかまと、ただ手をかき、面を振り、そこの人のあぎとふやうにすれば、さすがに、いとせむかたなくをかしく見ゆ。樺市に帰りて、としみなど言ふれど、われはなほ精進なり。そこよりはじめてあるじするところ、ゆきもやらすあり。ものかづけなどするに、手を尽くしてもすめり。

泉川、水まさりたり。いかになど言ふほどに、「宇治より舟の上手具してまるれり」と言ふに、「わづらはし、例のやうにて、ふと渡りなむ」と、男

がたには定むるを、女がたに、「なほ舟にてを」とあれば、さらばとて、みな乗りて、はるばると下るこち、いと労あり。楫取りよりはじめ、うたひののしる。宇治近きところにて、また車に乗りぬ。さて、「例のところには方悪し」とて、とどまりぬ。……。

日よいほどにたちしかば、暗くぞ京に到着きたる。

* 「音せでわたる森」は、長谷山神社の森を指すかという説がある。

〈写真④〉

○『枕草子』

「市は」段

市は、たつの市。さとの市。つば市、やまとにあまたあるなかに、長谷に詣づる人の、かならずそこに泊るは、観音の縁のあるにやと、心ことなり。

「池は」段

池は、勝間田の池。磐余の池。贅野の池、初瀬に詣でしに、水鳥のひまなくるて立ちさわぎしが、いとをかしう見えしなり。

「卯月のつごもり方に」段

卯月のつごもり方に、初瀬に詣でて、淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかきすゑて行くに、菖蒲、菰などの末短く見えしを、取らせれば、いと長かりけり。菰積みたる舟のありくこそ、いみじうをかしかりしか。「高瀬の淀に」とは、これをよみけるなめりと見えて。三日帰りしに、雨のすこし降りしほど、菖蒲刈るとて、笠のいと小さき着つつ、脛いと高き男、童などのあるも、屏風の絵に似て、いとをかし。

* 「淀」から詣でる行程については（北よりする桂川、宇治川、巨椋池、南よりする木津川が山崎で合流するが、その少し手前で流れを越え、木津川に沿って南下するのである。）（角川文庫『新版枕草子』）という。

〈写真⑤〉

「初瀬に詣でて」段

初瀬に詣でて、局にみたりしに、あやしき下臈どもの、うしろをまかせつつる並みたりしこそ、ねたかりしか。

いみじき心おこしてまゐりしに、川の音などのおそろしう、くれ階をのぼるほどなど、おぼろけならず困じて、いつしか仏の御前をとく見たてまつらむと思ふに、白衣着たる法師、糞虫などのやうなる者どもあつまりて、立ちぬ、顔づきなどして、つゆばかり所もおかぬけしきなるは、まことにこそねたくおぼえて、おし倒しもしつべき心地せしか。

○『源氏物語』

玉鬘巻

「うち次ぎては、仏の御中には、初瀬なむ、日本の中にはあらたなる験あらはしたまふと、唐土にだに聞こえあむなり。ましてわが国の中にこそ、遠き国の境とても、年経たまひつれば、若君をばまして恵みたまひてん」とて、出だし立てたてまつる。ことさらに徒歩よりと定めたり。ならばぬ心地にいとわびしく苦しけれど、人の言ふままにもおぼえて歩みたまふ。……からうじて椿市といふ所に、四日といふ巳の刻ばかりに、生ける心地もせで行き着きたまへり。〈中略〉

参り集う人のありさまども、見下さるる方なり。前より行く水をば、初瀬川といふなりけり。右近

「ふたもとの杉のたちどをたづねずはふる川のべに君をみましやうれしき瀬にも」と聞こゆ。

初瀬川はやくのことは知らねども今日の逢ふ瀬に身さへながれぬとうち泣きておはするさま、いとめやすし。

椎本巻

二月の二十日のほどに、兵部卿宮初瀬に詣でたまふ。古き御願なりけれど、思しも立たで年ごろになりけるを、宇治のわたりの御中宿のゆかしさに、多くはもよほされたまへるなるべし。……。

六条院より伝はりて、右大殿しりたまふ所は、川よりをちにいと広くおもしろくてあるに、御設けさせたまへり。

宿木卷

賀茂の祭など騒がしきほど過ぐして、二十日あまりのほどに、例の、宇治へおはしたり。……。「常陸前司殿の姫君の初瀬の御寺に詣でもどりたまへるなり。はじめもここになむ宿りたまへりし」と申すに、おいや、聞きし人ななりと思し出でて、人々をば他方に隠したまひて、「はや御車入れよ、ここに、また、人宿りたまへど、北面になん」と言はせたまふ。〈中略〉

「さも苦しげに思したりつるかな。泉川の舟渡りも、まことに、今日は、いと恐ろしくこそありつれ。この二月には、水の少なかりしかばよかりしなりけり。いでや、歩くは、東国路を思へば、いづこか恐ろしからん」など、二人して、苦しとも思ひたらず言ひひるたるに、主は音もせでひれ臥したり。

〈中略〉

「昨日おはしつきなんと待ちきこえさせしを、なか今日も日たけては」と言ふれば、この老人、「いとあやしく苦しげにのみせさせたまへば、昨日はこの泉川のわたりにて、今日も無期に御心地ためらひてなん」と答へて、起こせば、今ぞ起きるたる。

手習巻

そのころ横川に、なにがし僧都とかいひて、いと尊き人住みけり。八十あまりの母、五十ばかりの妹ありけり。古き願ありて、初瀬に詣でたりけり。睦まじうやむごとなく思ふ弟子の阿闍梨を添へて、仏、経供養すること行ひけり。事ども多くして帰る道に、奈良坂といふ山越えけるほどより、この母の尼君心地あしうしければ、かくては、いかでか残りの道をもおはし着かむともて騒ぎて、宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるにとどめて、今日ばかり休めたてまつるに、なほいたうわづらへば、横川に消息したり。……やうやう率てたてまつるべきに、中神塞がりて、例住みたまふ所は思むべかりけるを、故朱雀院の御領にて宇治院といひし所、このわたりならむと思ひ出でて、院守、僧都知りたまへりければ、一二日宿らんと言ひにやりたまへりければ、「初瀬になん、昨日みな詣でにける」とて、いとあやしき宿所の翁を呼びて率て来たり。

夢浮橋巻

「かしこにはべる尼どもの、初瀬に願はべりて詣でて帰りける道に、宇治院といふ所にとどまりてはべりけるに、母の尼の労気にはかにおこりていたくなんわづらふと告げに、人の参で来たりしかば、まかりむかひたりしに、まづあやしきことなん」とささめきて

○『更級日記』

初度の初瀬詣 永承元年（二〇四六）十月

《往路》

そのかへる年の十月二十五日、大嘗会の御禊とのしるに、初瀬の精進はじめて、その日京を出づるに、さるべき人々、「一代に一度の見物にて、田舎せかいの人だに見るものを、月日多かり、その日しも京をふり出でていかむも、いとものぐるほしく、ながれての物語ともなりぬべきことなり」などはらからなる人はいひ腹立てど、児どもの親なる人は、「いかにもいかにも心にこそあらめ」とて、いふにしたがひて、出だしたつる心ばへもあはれなり。……その晩に京を出づるに、二条の大路をしも渡りて行くに、……。

道頭証ならぬさきにと、夜深う出でしかば、立ち遅れたる人々も待ち、いとおそろしう深き霧をも少しはるけむとて法性寺の大門に立ちとまりたるに、田舎より物見に上る者ども、水の流るるやうにぞ見ゆるや。すべて道もさりあへず、物の心知りげもなきあやしの童べまで、ひきよきて行き過ぐるを、車をおどろきあさみたることかぎりなし。これらを見るに、げにいかに出で立ちし道なりともおぼゆれど、ひたぶるに仏を念じたてまつりて、宇治の渡りに行き着きぬ。そこにもなほしもこなたさまに渡りする者ども立ちこみたれば、舟の楫とりたるをのこども、舟を待つ人の数も知らぬに心おごりしたるけしきにて、袖をかいまくりて、顔にあてて、棹におしかかりて、とみに舟も寄せず、うそぶいて見まはし、いとみじうすみたるさまなり。むごにえ渡らで、つくづくと見るに、紫の物語に、宇治の宮のむすめどものことあるを、いかなる所なれば、そこにも住ませたるならむとゆかしく思ひし所ぞかし。げにをかしき所かなと思ひつつ、からうじて渡りて、殿の御領所の

宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女君の、かかる所にやありけむなど、まつ思ひ出でらる。

夜深く出でしかば、人々こうじてやひろうちといふ所にとどまりて、物食ひなどするほどにしも、供なる者ども、「高名の栗駒山にはあらずや。日も暮れがたになりぬめり。ぬしたち調度とりおはさうぜよや」といふを、いとものおそろしう聞く。その山越えはてて、贄野の池のほとりへいきつきたるほど、日は山の端にかかりにたり。「今は宿とれ」とて、人々分かれて、宿もとむる、所はしたにて、「いとあやしげなる下衆の小家なむある」といふに、「いかがはせむ」とてそこに宿りぬ。……。

つとめてそこを立ちて、東大寺に寄りて拝みたまつる。石上もまことに古りにけること、思ひやられて、むげに荒れはてにけり。その夜、山辺といふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど、経すこし読みたまつりて、うちやすみたる夢に、……うれしく頼もしくて、いよいよ念じたまつりて、初瀬川などうち過ぎて、その夜御寺に詣で着きぬ。祓へなどして上る。三日さぶらひて、暁までむとてうちねぶりたる夜さり御堂の方より「すは、稲荷より賜はるしるしの杉よ」とて、物を投げ出づるやうにするに、うちおどろきたれば、夢なりけり。

《復路》

暁、夜深く出でて、えとまらねば、奈良坂のこなたなる家を尋ねて宿りぬ。……。

いみじう風の吹く日、宇治の渡りをするに、網代いと近う漕ぎ寄りたり。

音にのみ聞きわたりこし宇治川の網代の波も今日ぞかぞふる

再度の初瀬詣で

また初瀬に詣づれば、はじめにこよなくもの頼もし。ところどころにまうけなどして行きもやらず。山城の国柞の森などに紅葉いとをかしきほどなり。

初瀬川わたるに、

初瀬川たちかへりつつたづぬれば杉のしるしもこのたびや見む

と思ふもいと頼もし。三日さぶらひてまかでぬれば、例の奈良坂のこなたに、小家などに、このたびは、いと頼ひろければ、え宿るまじうて、野中にかり

そめに庵つくりて据ゑたれば、人はただ野にゐて夜を明かす。

○『榮花物語』卷第十八たまのうてな

三月ばかりに、四条大納言初瀬に参りたまへり。かへさに泉河のもとにて、「ここぞかし、御獄のかへさに姫宮の御事聞きはべりしは」とて、定頼の君

見ること袖ぞぬれける泉河憂きこと聞きしわたりと思へば

大納言うち泣かせたまひて、

妹背山よそに聞くだに露けきに子恋の森を思ひやらなん

いみじうあはれに思したりとなん聞きはべりし。

① 樺市跡を示す道標。



② 樺市付近に祀られた海柘榴市観音の跡



③長谷寺の長い階を望む。



④長谷山山口神社の裾を流れる初瀬川



⑤石清水八幡宮より宇治、木津方面を望む。

手前から木津川、宇治川、桂川の三川が流れる。淀から舟で初瀬を目指すという行程は、この木津川を利用したもの。またこの三川の合流地点を中心に広がっていたという、面積八平方キロという広大な巨椋池の面影を彷彿とさせる平地の広がりである。

